

## 看護技術の練習場面における学習過程の分析 —再生刺激法による学生自身の振り返りから—

神原裕子  
(Yuko KAMBARA)

### 【要約】

本研究の目的は、学生の看護技術の練習場面における学習経験を明らかにし、看護技術教育における練習の位置づけを検討する資料を得ることである。看護系大学生3名の練習場면을ビデオ撮影し、インタビューした結果をKJ法で分析した結果、次のことが明らかになった。1. 学生は、看護技術の練習場面で練習方法を工夫しながら、友達の指摘や教員の助言を求めながら練習している、2. 看護技術の練習に対して目標をもち、自分自身を変えていきたい、技術を身につけたいと思いつながら練習していることから、貴重な学習経験となっている、3. 練習場面で困る、混乱する、うまくいかないという経験をしており、学習支援の必要性が示唆される。学生は、看護技術の練習場면을ビデオで見ることにより、自己を客観視して振り返ることができていたため、今後はビデオ活用を含めた学習支援の方法を検討していきたい。

キーワード：看護技術、練習学習、ビデオ、看護系大学生

### I はじめに

本研究は、大学教育における「看護技術」の修得が、どのように行われているか、学生の練習場面に焦点をあて、その学習経験内容を明らかにしようとするものである。

「看護技術」の看護基礎教育における教育に関しては、2003年に厚生労働省より「新たな看護のあり方に関する検討会報告書」<sup>8)</sup>や「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」<sup>9)</sup>が公開され、卒業時の到達水準が示されて以降、急速に関心が集まり、ここ数年で卒業時の到達度チェックなどの研究報告が目につくようになった<sup>11)</sup>。2007年には「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」<sup>10)</sup>が示され、重点的な教育内容として認識されつつある。背景には、卒業時の学生の看護技術力の低下があり、医療の質保証のためには、看護基礎教育の段階から一定の看護技術を修得しておくことが求められている、といえる。

本研究で取り上げた「看護技術」の練習場面の学習は、「看護技術」修得の重要な学習機会となっていると考えられる。授業時間外での自己学習であるため、学

生の自由な発想や工夫が生かされる半面、学生個々の力量に任され、効果的な練習にならない場合も多いと推測される。また、現在のカリキュラムでは、総授業時間数が減少し、演習や実習時間の中で「看護技術」を修得することが困難になっている。したがって、学生自身が自己学習として練習する時間の教育的価値は高く、練習効果を高める教育方法が検討されることにより、学生の看護技術力は高まると予測される。そこで、まず、練習場面での学生の経験が、学習経験としてどのように成立しているのか、明らかにすることが必要と考えた。

「看護技術」の練習に関する先行研究では、授業のなかでの練習方法の工夫やシステム作りなど、教育者主体の研究報告は多い<sup>12-14)</sup>ものの、学習者の経験という視点から研究されたものは見当たらない。学習は学習者を主体に考える必要があり、学習者の視点からの研究は欠かせない。また、筆者自身は、演習や実習場面における学習経験について以前報告している<sup>7)</sup>が、練習場面については取り上げなかった。看護技術の修得において練習は不可欠の要素であるため、練習場面の

学習経験を明らかにする意味は大きい、と考える。研究成果は、練習場面への教育介入を検討するうえで貴重な資料となる。

## II 研究目的

看護系大学生の「看護技術」の練習場面における学習経験を明らかにし、看護技術教育における練習への教育介入を検討するための示唆および資料を得る。

## III 研究方法

### 1. 研究対象：A大学看護学部2学年に在籍する3名。

学生は、1年次に基礎看護学において「看護技術」を学び、自主的に練習した経験がある。また、看護技術試験を受け、教員により看護技術のチェックを受けた経験もある。

### 2. 研究期間：2007年8月～9月

3. データ収集の方法：研究対象者が看護技術の練習をしている場面をビデオカメラ1台で撮影した。カメラの位置は、学生の練習の妨げにならないように、視界からはずれる位置に三脚で固定した。

練習後の記憶の鮮明なうちに、再生したビデオを研究者とともに視聴しながら、インタビューした。インタビューは、再生刺激法<sup>17)</sup>を参考に複数の注目した場面を停止し、そのときに考えていたことや思ったことを質問する方法で進め、時間は1時間以内とした。学生3名へのインタビュー内容は、場面の状況に影響されるため、学生によって違いがあった。また、再生刺激法を参考にしながらインタビューされた場合、対象者には必ず自己を振り返る反応が生じる。それに対する制限を加えず、思ったことも自由に表現してもらった。インタビューの場所は、騒音のない落ち着いた場所を確保し、プライバシーに配慮した。インタビューの内容は、研究対象者の許可を得て録音し、逐語録にした。

### 4. 再生刺激法について

再生刺激法とは、①授業場面のビデオ録画、②重要な授業場面を3～5個選択、③授業終了後、各場面を再生、視聴させ、それらの重要な授業場面でビデオを一時停止、④授業中にその場面で考えていたことや思っていたこと、感じていたことを質問紙形式で自己報

告、⑤自己報告された子どもの内面過程（認知・情意）を分析する、で構成されている。

再生刺激法は、小学校、中学校、高校などの教師の授業研究に活用されることが多いため、「子ども」という表現が用いられているが、この方法を参考にしたのは次のような理由による。

- 1) 練習の途中で学生に質問することは非日常の条件を作り出すことになり、データとして不適切になる。日常の練習場面のデータを得るためには、場面を変えて質問する必要がある。
- 2) 学生の練習場面について、教員の目から評価するのではなく、学習者の内面を把握するため。

## 5. データの整理・分析方法

逐語録を丁寧に読み、対象の内面に生じた考え、感じたこと、思ったことを抜き出し、意味を壊さないように一行見出しとして抽出した。抽出した一行見出しは、コンピューターソフトITEC社製の「超発想法ウルトラプレゼン」KJ法に入力してカード化し、関連性のあるカードの集団をつくった。カードの集団にはさらに見出しをつけ、同様のことを2～3回繰り返し、それぞれの集団が他の集団との意味のつながりを見出せなくなった段階で、関連性をみながら空間配置し図式化した。図式から文章化へ進め、分析した。

分析結果は、看護技術教育に関わる看護教員のスーパーバイズを受けて、信頼性を確保した。

## IV. 倫理的配慮

研究対象者には、研究の目的、方法、研究協力は自由意志であり、同意しない場合でも不利益をこうむることはないこと、協力に同意したあとでも協力を中止することはいつでも可能であること、研究データは研究者が鍵のかかる場所で管理し、研究終了後は破棄することを文書と口頭で説明し、同意を得た。本研究は、インタビュー時に語られる内容によってはプライバシー侵害の可能性があるため、プライバシーへの配慮を十分行うことも説明した。

## V. 用語の定義

看護技術：氏家<sup>16)</sup>は看護技術を、「技術は看護行為を具体的に表現する技に心情を含めた専門的な技術すなわちアート」とする。日野原<sup>2)</sup>もまた、看護の技をアートと定義している。川島<sup>6)</sup>は、看護技術の安全性・

安楽性を重視した考えを述べており、これらを参考に次のように定義する。「看護技術とは、対象の反応に注目しながら、看護の目的をもって行われる一連の行為であるが、目に見える形に表れるテクニックに留まらず、そこには看護者の考え、感情などが表現され、対象の安全、安楽を確保することを最低条件とする。」

**学習：**佐伯<sup>15)</sup>による定義を参考に次のように定義する。「学習とは、学習者の主体性に基づき、新たな知識や思考、行動を獲得し、学習者の内面で価値付けがなされること。」

**練習：**学習の一形態で、獲得した知識をもとに、目的を達成するための行動を繰り返しながら、その経験を自身の中に価値づけること。

**看護系大学生：**看護基礎教育の大学教育機関で学ぶ学生。4年間の教育期間を経て、看護師資格（助産師、保健師の場合もある）を得るための国家試験受験資格を得る。

## VI. 結果

### 1. 看護技術の練習場面について

3名の学生の練習場面の詳細は、表1に示した。練習内容は学生が選択したが、いずれも、日常生活援助技術の「ベッドメイキング」の練習であった。

### 2. 看護技術の練習場面の内面に生じた過程と、振り返って思うこと

看護技術の練習場面の内面に生じた過程と振り返って思うことを、KJ法に基づき図解化したのが図1～3である。KJ法では、図解をもとに文章化する過程で分析が進み、この文章化は図解の弱点を修正する力をもつ<sup>5)</sup>とされている。

学生3名は、それぞれが違った背景をもち、練習場面も違っていることから、インタビューで語られる内容が同じであっても、文脈の中の意味が違うことがある。そのため、それぞれのインタビュー内容を個別に分析し、その結果を比較検討することとする。

#### 1) 学生Aの練習場面の分析（図1参照）

（アンダーラインは、図解のカードのデータ）

##### < 1. 原則やポイントを意識しながら練習する >

練習場面で学生Aは、ベッドメイキングの原則を守るようにしながら、シーツのしわや角の形、横シーツの目的、忘れがちなボディメカニクスなどの具体的なポイントにも配慮しながら練習している。学生Aが認識している原則やポイントは行動レベルにとどまり、個々の原則の意味を十分理解しないまま、練習している可能性がある。

##### < 2. 友達と話し合いながら、方法を工夫しながら練習している >

練習場面で学生Aは、練習方法を工夫しながら練習している。そのときに、友達と話し合いながら工夫したり、教えあって練習しており、友達との練習に慣れている。したがって、一人で練習するときには友達に相談できないので、困ってしまい、いつもと違う進め方で、戸惑ってしまう。学生Aの練習内容は、学生間の意見交換による影響が大きい可能性がある。

##### < 3. できない自分に気づかないまま練習している >

学生Aは、「ゆるみ」を「たるみ」と間違えて覚えていた。また、忘れてしまうことがあり、あまり頭に入っていないのかなと思っている。しかし、そのことを深く考えずに練習しているので、練習の最中はそのことに気づかないし、できるつもりで練習している。今

表1 学生の練習場面

学 生	練習項目	練習場面の状況
A	ベッドメイキング	練習相手が見つからず、ベッドメイキングを一人で実施した。作成されていたベッドをはがし、そのシーツをたたみかえてから始めた。
B	ベッドメイキング	学生Cと一緒に練習した。いつもCと練習している。作成されていたベッドをはがし、そのシーツをたたみかえてから始めた。学生Cより先にベッドメイキングを実施した。
C	ベッドメイキング	学生Bと一緒に練習した。いつもBと練習している。作成されていたベッドをはがし、そのシーツをたたみかえてから始めた。学生Bのあとでベッドメイキングを実施した。

回、ビデオをみて気づくことやわかることがあります、できない自分に気づかないまま練習していたことがわかった。

学生Aは、原則やポイントを意識しながら、友達と練習方法を工夫しながら練習に取り組んでいるにも関わらず、ベッドメイキングの自分自身の課題に気づいていなかった。学生Aは、自分自身の練習成果を評価する基準を持たないまま練習を重ねていた可能性があり、ビデオで自分自身の行動を見ることにより、初めて客観的にみつめる機会を得たと考えられる。

#### <4. テキストの活用方法がよくわからない>

学生Aの普段の練習では、練習の流れなどをあらかじめ確認してから始めるほうがよいと考えて練習しており、練習中はテキストは見ないほうが覚えるからよい、と考えているが、今日はテキストは忘れたので、確認できなかった。何を、どこまで確認しているのか、練習で何を身に着きたいのかが曖昧である。練習で、テキストなどの参考資料を、どのように活用すればよいのか、つかめていない可能性がある。

#### <5. うまくできないときには、混乱する>

練習場面で学生Aは、緊張すると忘れたり、うまくいかないとき、わからなくなるときがあつてあせることもある。また、練習の途中で、今まで経験したことがないことは混乱したり、迷うこともある。今日の練習でもうまくいったところもあるが、うまくできなかったところがあった。できない自分に気づいていない学生は、うまくできないことを予測できず、予測できないことに対しては混乱が大きいと考えられる。

#### <6. 思わずやってしまう>

練習場面で学生Aは、意味のない行動をとることや、思わずやっちゃうことがある。今日の練習でも、シーツが短いがとりあえず入れようとして、原則やポイントを意識した行動がとれなかった。これは、できない自分に気づいていないことやうまくできないときに混乱することからの影響が考えられ、とりあえずのその場しのぎの行動とも考えられる。

#### <7. わからないときでも努力する>

練習場面で学生Aは、間違いに途中で気づいてやり直そうと思ってシーツをたたんだり、逆になった横シーツは直したり、うまくスプレッドが入らなかったら下からシーツや毛布を引っ張り出して直している。また、わからなくなったとき、あわてないで今までのやり方を思い出すようにしたり、どうしようと思ったあ

とは落ち着くようにして、自己の行動を修正しようと努力している。うまくいかなくなってしまうときにはなんとかしなくちゃ、と思って、投げ出さずに取り組もうとしている。周りにいる友達に聞くようにして、解決策を見出そうとしている。

#### <8. ベッドはきれいに作りたいたい>

ベッドメイキングの練習で学生Aは、先生のようにきれいにやりたい、と考え、先生の実施場面を思い描き、モデルとして認識しながら、いつもきれいに思って先生を目標に練習している、と考えられる。そして、ベッドは落ち着いて休める、きれいなベッドにしたいと考えている。先生のつくるベッドに近づきたいと思いながら、努力もしているが、うまくいかず混乱する二つの対立する感情を同時に経験しながら練習している可能性がある。

#### <9. さらに練習する>

ビデオで自分自身の練習を視聴した学生Aは、角は自信が持てるまで練習する、と考えており、練習の必要性を感じている。そして、練習して自信がもてれば、頭が真っ白になつたりしないと意味づけ、迷ったり、混乱したりしないようにするためには練習が必要であると考えた可能性がある。学生Aは、うまくいなくて混乱した自分自身をビデオで客観的に見つめることにより、うまくいかない個々の現象を視覚的に確認し、自分自身の問題として認識できるようになったと考えられる。その結果、自信が持てるようになるまで練習する必要があることを認識できたと考ええる。

#### <10. 速さを気にするがそれだけではないと思う>

練習場面で学生Aは、早く終わらせなきゃと思ったが、元からやるのが遅いので常に急がなきゃ思っているため、ベッドメイキングの練習を進める上で速さがどういう意味があるか、考えが及んでいなかった可能性がある。ベッドメイキングは早けりゃいいわけではない、いつもきれいに作りたいたい、と思っているにもかかわらず、自分の行動が遅いと感じているため急がなきゃ思ってしまう、焦りにもつながっている可能性がある。

## 2) 学生Bの練習場面の分析 (図2参照)

### <1. 方法を工夫しながら練習している>

練習場面で学生Bは、友達と練習するようにしている。途中で迷うことがたまにあるので、それは(友達に)聞きながらやり、普段練習するときは、人や患者

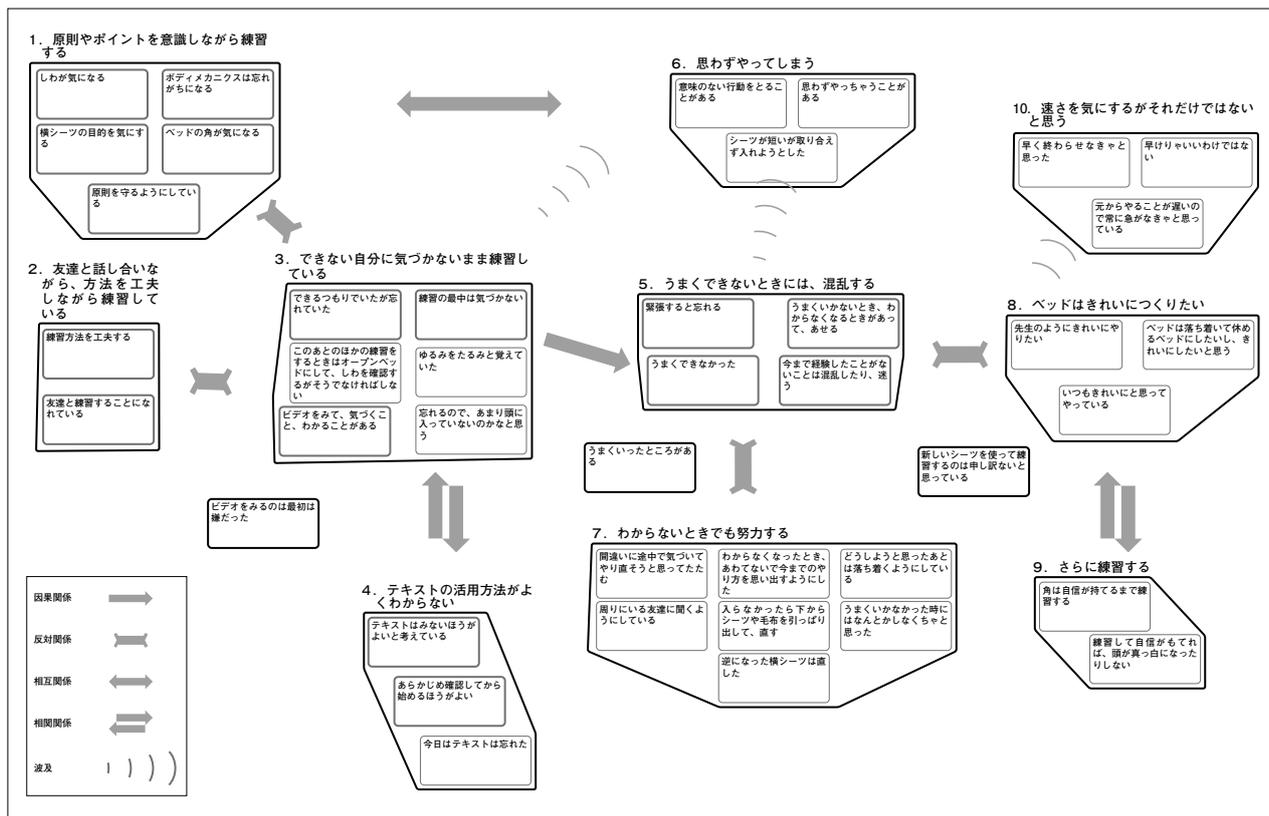


図1 看護技術の練習場面の内面過程と振り返って思うこと 学生A

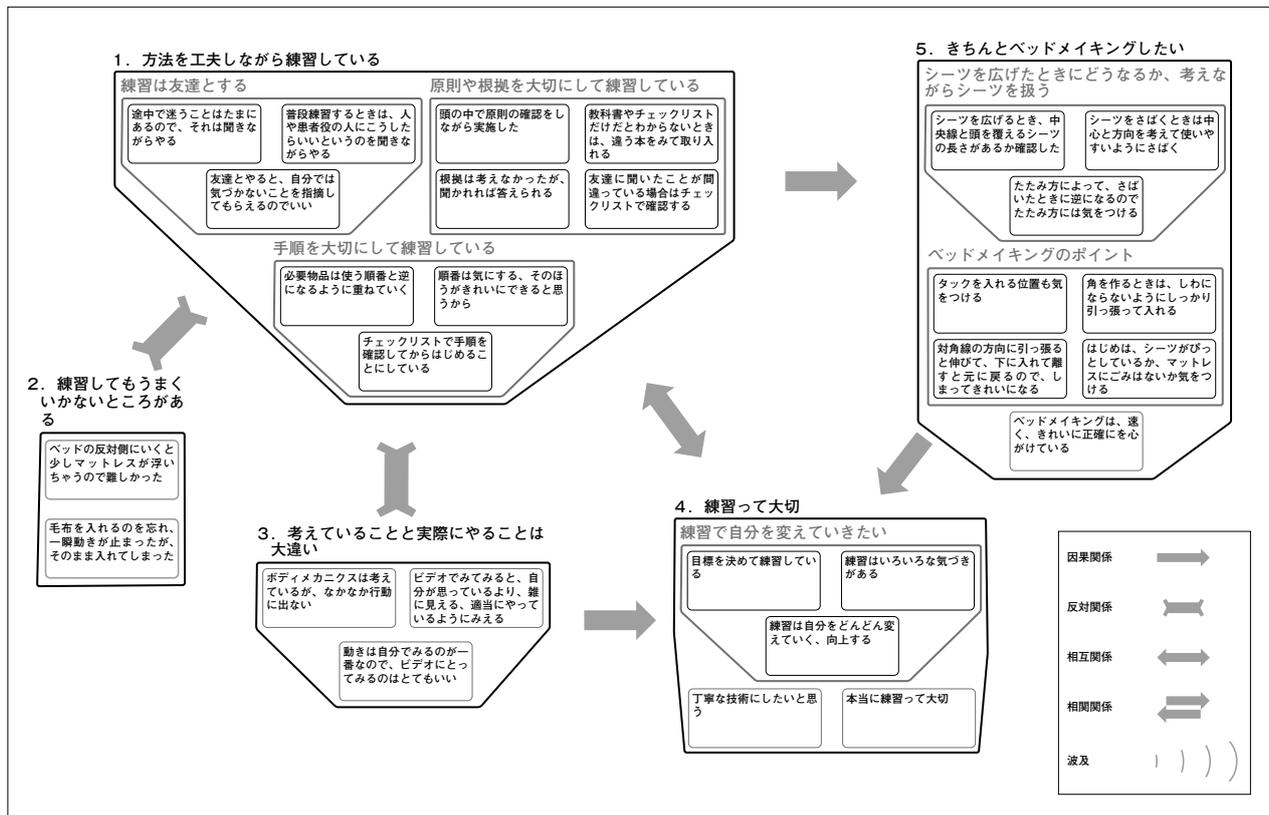


図2 看護技術の練習場面の内面過程と振り返って思うこと 学生B

役の人にこうしたらいいというのを聞きながらやるようにしている。また、友達とやると、自分では気づかないことを指摘してもらえるのでいい、とも思っている。練習場面での友達を、自分自身を客観的に見て気づいたことを指摘してくれる存在として、重視していると考えられる。学生Bは、原則や根拠を大切にしながら練習している。頭の中で原則の確認をしながら実施し、原則の根拠は考えなかったが、聞かれば答えられる。普段の練習では、教科書やチェックリストだけだとわからないときは、違う本をみて取り入れるようにしている。方法の根拠となるものを自分から求め、確認しながら練習している。学生Bは、手順も大切に練習している。チェックリストで手順を確認してから始めることにしており、順番を気にしたほうがきれいにできると思っている。ベッドメイキングの必要物品の準備は、使う順番と逆になるように重ねておく。

学生Bは、自分自身の気づかない部分を指摘してくれる友達の存在や原則、手順を大切にしながら、自分なりに工夫を加えて練習している、と考えられる。

#### <2. 練習してもうまいかないけないところがある>

学生Bのベッドメイキングの練習場面では、ベッドの反対側にいくと少しマットレスが浮いちゃうので難しかった。また、毛布を入れるのを忘れ、一瞬手が止まったが、そのまま入れてしまった。何度か練習していても、うまくいかないことは起こってしまう、と感じているが、それは練習を繰り返しながら、友達に聞きながら、方法を工夫して練習していく課題として認識している可能性がある。

#### <3. 考えていることと実際にやることは大違い>

学生Bの練習場面では、ボディメカニクスは考えているが、なかなか行動に出ない。ビデオをみると、自分が思っているより雑に見えるし、適当にやっているように見える、と振り返っている。考えながら練習しているはずだが、客観的な目でみると、学生Bが思い描いていた看護技術の形と違っており、もっとこうしなければならぬ、という気づきを得られた可能性がある。そのため、動きは自分で見るのが一番なので、ビデオにとってみるのはとてもいい、と評価していると考えられる。

#### <4. 練習って大切>

練習場面で学生Bは、目標を決めて練習している。さらに、練習はいろいろな気づきがあり、自分をどん

どん変えていく、向上すると考えている。さらに、丁寧な技術にしたいと思い、本当に練習って大切と考えている。学生Bにとって練習は、単に手順を覚えて方法を踏襲するだけの価値ではなく、練習という場面での経験が自分自身の成長に必要な貴重なものであると捉えている可能性がある。学生Bのこのような考えは、練習方法の工夫とも関連しあっていると考えられる。

#### <5. きちんとベッドメイキングしたい>

学生Bは、ベッドメイキングの練習場面で、シーツを広げるとき、中央線と頭を覆えるシーツの長さがあるか確認し、シーツをさばくときは中心と方向を考えて使いやすいようにさばいている。また、たたみ方によって、さばいたときに逆になるのでたたみ方に気をつけている。これは、ベッドメイキングの全体の流れの中で、シーツのたたみ方、広げ方、さばき方がどういう意味をもっているのか、考えながら実施できると判断できる。現在実施していることと、その次に実施することとの関連性も考えられている可能性がある。また、学生Bは、ベッドメイキングのポイントを意識して練習している。はじめにシーツがピッと伸びていてマットレスにごみがないか気をつけ、タックを入れる位置に気をつけ、角を作るときにしわにならないように引っ張るようにしている。そして、ベッドメイキングは、早く、きれいに正確に心をかけて練習している。細かな部分への気づきは、全体を把握したうえで考えられているポイントであり、工夫しながら練習した結果得られた気づきの可能性があり、練習を大切にしていることとも関連があると考えられる。

#### 3) 学生Cの練習場面の分析 (図3参照)

##### <1. 自分なりに練習方法を工夫している>

学生Cは、一回一回の練習を大切にしたいし、練習のとき患者役になりきるようにしている。また、知識と結びつけることも大事にしている。そして、ちゃんとやりたいから、(練習)相手が決まってしまう。練習中は、集中して練習している。やりながら、今やっていることと次にやることを考えているし、看護師役のときには集中するので無口になる。友達同士でたたくときのルールは決めてあるが、自分でも確認するようにしている。また、たたみ方が正確か、も確認するようにしている。チェックリストは、間違えていないかの確認に使い、練習している。学生Cは、手順どおり

にやると予測がつくので重要だし、スムーズにできると考えている。順番どおりに、スタートからゴールにたどり着くというように、それにしがってやりたいとも感じている。学生Cは、練習方法の中で手順を積極的に活用しており、その意味を自身で考えているが、手順どおりにいかない場合については、考えが及んでいない可能性がある。ベッドメイキングはシーツをたたみ替えて練習するほうが、たたみ方も忘れないようにできると考えている。また、実習室にしばらく入っていないときは、ベッドメイキングから始めるようにしている。友達でやる気がない人は、患者役になってもうようようにしている。これらから、どうしたら効果的な練習になるか自分なりに考え、実施している。その方法の中に、一緒に練習する友達の役割も組み込んで工夫していることがわかる。

<2. 練習で困ることがある>

学生Cは、練習しながら別の話をするすることがあり、練習でふざけちゃう人がいると違う方向にいつちゃうことがある。そして、みんなの気持ちが合わないこともある。友達同士だと、役になりきれないこともある。しかも、練習時間が限られている。細かなことを確認してやらないと、不安になることもある。

学生Cは、練習に対して真剣に取り組みたい気持ちと細かなことは確認しながら進めたい気持ちがあるが、練習時間の制限や一緒に練習する友達からの影響により、思うように練習できない不全感を感じている可能性がある。

<3. 技術を身につけるために努力している>

学生Cは、ベッドメイキングでは、シーツのさばき方で、先生に言われたことを重視してやっていたり、シーツを引っ張るといというのを教えてもらって実施していたり、どうしてもうまくいかないときに先生に確認してもらってそれでよいといわれたりしながら、練習している。先生に聞いて確認が取れたときには、根拠も聞くようにしている。みんなで行き詰ってしまうと先生に聞いて納得いく、ということをしており、先生の説明に納得できなかったことはなかった。先生がいいということに従ってやりたい、と考えている。そして、自分はまだ、疑問を持つレベルではないかもしれない、と自己評価している。これらのことから、先生を目標として受け止め、先生の指導にコミットしている様子がうかがえる。指導する先生の影響を受けやすい状態で練習していると考えられる。

また、学生Cは、技術を身につけたいと考えて練習

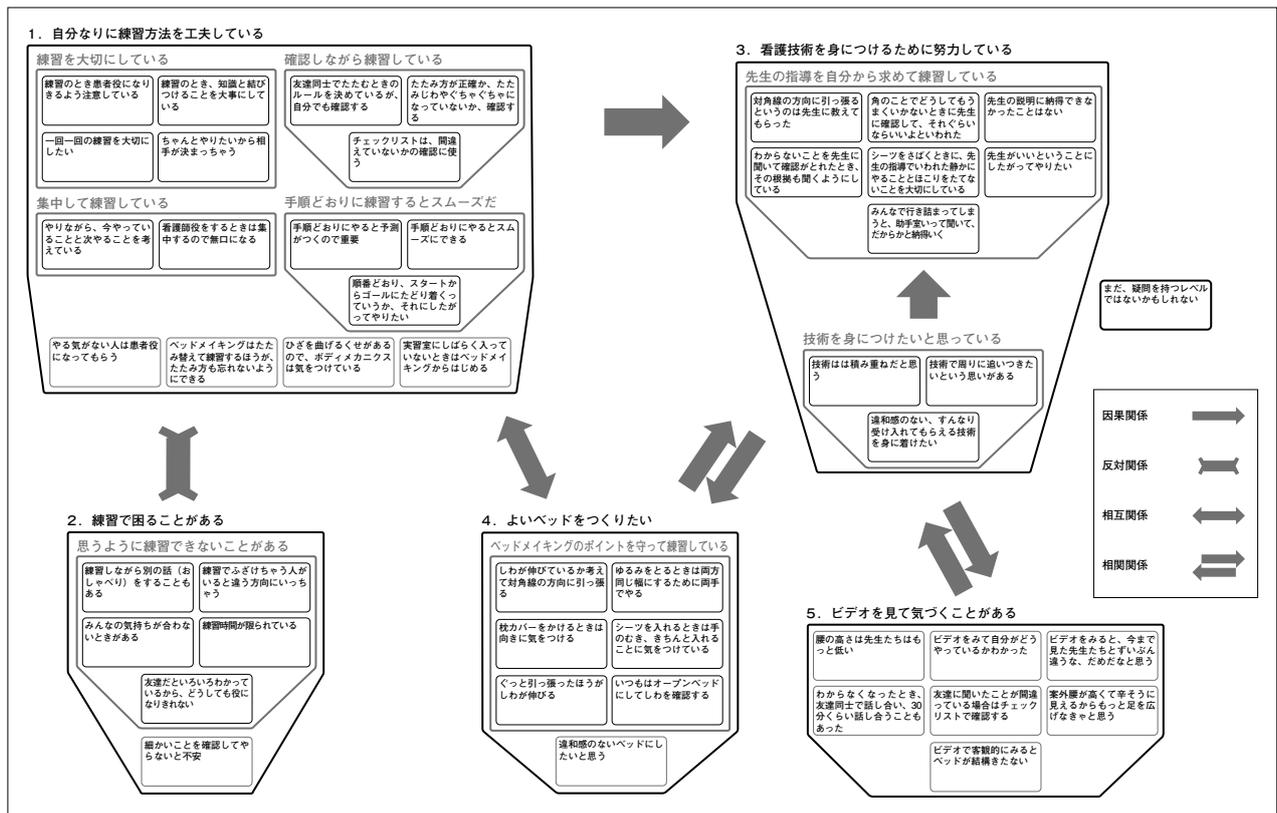


図3 看護技術の練習場面の内面過程と振り返って思うこと 学生C

している。技術は積み重ねだと思し、技術で周りに追いつきたいという思いがある。違和感のない、すんなり受け入れてもらえる技術を身につけたい、と思って練習している。これらのことから、学生Cは、地道な努力を地味重ねることを重視して練習していると考えられる。そして、練習の目標が対象の視点から語られていることから、対象の反応を重視しながら練習していると考えられる。

#### <4. よいベッドを作りたい>

学生Cがベッドをつくるときに気をつけているポイントは、しわが伸びているか考えてシーツを引っ張る、ゆるみは左右同じ幅になるように両手でやる、枕カバーをかけるときには枕の向きに気をつける、シーツを入れるときは、手の甲を上に入れて入れる、オープンベッドにしてしわを確認する、などである。それは、違和感のないベッドにしたいからだ、と考えている。学生Cのよいベッドを作るポイントは、練習の積み重ねによって修得したポイントで、学生Cの違和感のないベッドにしたいという思いを反映しながら修得したポイントの可能性がある。

#### <5. ビデオをみると気づくことがある>

学生Cは、ビデオを見て自分を振り返りながら気づいたことがある。案外、腰が高くてつらそうに見えるから、もっと足を広げなきゃと思ひ、腰の高さは先生たちはもっと低いことに気づいた。ビデオをみて、自分がどうやっているかわかり、ビデオで客観的にみると、ベッドが結構汚い、今まで見た先生たちとずいぶん違うな、だめだなと**思っている**。学生は、先生を目標にしていたが、自分のベッドメイキングを初めてビデオを見て、先生との違いに気づき、ややがっかりしている可能性がある。しかし、目標志向性が強いことから、気づいたことを技術の練習にいかしていかなければならない、と実感していると考えられる。

## Ⅶ. 考察

3名の「看護技術の練習場面における学生の内面過程と振り返って思うこと」の分析結果を、比較検討しながら、学生の学習経験について考察を加える。

### 1. 個々の学生の分析結果の比較

#### 1) 練習方法の工夫

3名の学生は共通して、練習方法の工夫をしながら練習していることが明らかになった。練習方法の工夫

に共通していることは、友達とともに練習し、話しながら、指摘しあって練習していることである。また、原則や根拠、手順を重視しながら、練習していることも明らかになった。

練習方法の工夫の内容をみると、原則やポイントの確認の段階で留まっていると考えられる場合（学生A）と手順や原則、根拠の意味を考え、それらを自分の練習に取り込んでいる場合（学生B）、そして練習場面の状況に合わせて、練習方法を工夫している場合（学生C）とが確認できた。

この違いの要因を明らかにすることは、本研究では限界があるが、分析結果から、練習の目的を明確にもっていることや練習に価値を見出していることが影響していると推測される。教員の示すモデルを目標として努力することや、練習が自分を成長させる機会と捉えて練習していることが、練習方法の工夫という形で現れるのではないかと考えられる。

日々の練習の目的は、授業場面と違い、学生自身が自分で選択、決定するものであり、練習内容も学生の主体性に任される。授業で学んだことを基にしてはいるものの、授業での学びは学生個々によって異なる。そのため、練習場面では授業内容の確認や認識のずれの調整などが必要になり、それらのやり取りを通して新たな学習が成立していると考えられる。したがって、看護技術の練習場面では、学びあう仲間としての友達の存在を、より重視していると考えられる。

本研究でも、友達から指摘を受けて練習に反映する場面や友達との会話ややる気のない友達の存在などから、練習内容にプラスやマイナスの効果を得ている様子が確認された。したがって、練習場面での学生同士でのやり取りの中には、練習結果を左右する重要な要素が隠されていると考えられ、今後は練習場面での学生同士のやり取りについてさらに検討を重ねていく必要がある。

#### 2) 練習場面でのうまくいかない経験や混乱

練習場面でのうまくいかない経験や混乱が、学生3名に共通して認められた。練習場面では、うまくいかない経験や混乱が生じたときに支援を求める教員がそばにいないため、学生同士での話し合いを通して解決されているようである。他には、テキストやチェックリストで確認することや教員に質問に行くという行動もとっていて、さまざまな情報源の中から、学生なり

に納得できる解決策を見出していた。

本研究の対象となった学生3名は、一年時に練習を積み重ね、看護技術試験を経験している。また、臨地実習も経験し、看護技術への具体的な指導を受けた学生である。それらの経験の中から、看護技術を修得してきたにもかかわらず、うまくいかない経験や混乱する場面が生じている。この段階での修得は、同じ条件で原則に基づいて実施できない、不安定な段階にあることが推測される。したがって、学生自身が自己の課題を明確にしながらかの対策が取れるようにサポートすることが必要で、放置すれば修得を停滞させることにつながる可能性が考えられる。

一方で、うまくいかない経験や混乱は、向上したいという欲求を刺激し、強い学習の動機づけとなる可能性があるため、学習の好機につながることも考えることができる。適切な助言のもとに練習が繰り返されれば、望ましい看護技術が身につく可能性がある。主体性を削がない練習のサポートシステムづくりが重要と考える。

### 3) 練習への思い、期待

学生3名は、看護技術の練習に対してそれぞれの思いや自分自身への期待ともいえる目標をもっていることが明らかになった。

3名ともベッドメイキングの練習場面であったが、出来上がるベッドに対する目標（どんなベッドをつくりたいか）を考えて練習していた。また、練習内での経験に自己成長の意味を見出し、練習が大切であると考える学生（学生B）や、看護技術の修得目標をモデルである教員と重ね、そこに向かって練習する学生（学生C）がいた。学生は、練習を繰り返す経験の中で、自分自身の変化を願っており、看護者としての自己成長を願っている様子がうかがえた。

単なる手順の修得や行動化の範囲を超え、看護者としてどのようになれば（実施できれば）よいのか、という高い目標を意識して練習することを可能にしたのは、それまでの練習成果や看護の対象者の立場を臨地実習でリアルに学んだことが影響していると考えられる。練習場面では、自己成長を目指す学生の学習活動が認められることを意味している。そのため、練習場面の学習としての価値は、高いと考えられる。

### 4) 自己を客観視する視点

学生3名は、今回初めて自身の練習場면을視覚的にビデオで確認する機会を得て、さまざまな気づきを得ていた。

3人に共通していたのは、できていないところに気づいた点にある。練習の過程で、友達に指摘を受けたり、話し合っただけ練習を重ねても、できていないところに気づかないまま練習を重ねていると考えられ、ビデオを見て初めて気づいていた。ビデオを見るという行動は、映像を視覚を通して取り込むだけでなく、学生自身の内面にある看護技術修得の目標やモデルとする教員と無意識に比較していると考えられる。その結果、他者から指摘されることなく、自分自身の気づきで改善の方向を目指す意志が生まれ、具体的な改善を目指して練習をさらに積み重ねる動機付けになると考えられる。以上のことは、「ビデオで気づく」、「ビデオで見ると思っているより雑だった」、「ビデオでみると先生たちとずいぶん違う」などの学生の言葉からも推測され、ビデオを見る効果として注目したい。

### 5) ビデオによる学習効果

ビデオによる学生のこのような反応は、研究方法による付随的な反応であるが、看護技術の効果的な教育方法の参考とするために、ビデオ視聴の意味について考察を加えたい。

練習場면을ビデオで撮影し、それを見ることによる教育効果はどのようなものであろうか。先行研究では、看護技術の授業（車椅子からベッドへ移乗、血圧測定）でビデオ撮影を行い、ビデオ映像を自己評価させていた（3）。また、その振り返りを自由記載させ、その内容とビデオ評価との関連について検討した結果、「ビデオ評価得点が高い学生は、自分自身の行動をコントロールし、患者の周囲の状況を把握し、看護技術の応用や工夫に関心をもっていた。評価得点が高い学生は看護技術の不備や冷静な行動の欠如を練習量の不足と結びつける傾向にあった。」と報告している。この結果は、学生が自らの映像を見る行動には、学生自身の客観的な評価視点を育てる可能性があることを示唆している、と考えられる。

また、小学校の体育の授業<sup>4)</sup>や中学の英語の授業<sup>1)</sup>にビデオを導入し、自己評価させることにより、学習効果が高まったという報告が行われている。いずれもビデオクリップとしてパソコンで自由に見ることがで

きるように環境を整え、ビデオを見ながら自己評価や意見交換をしやすくしている。子どもたちの反応には、「課題が見えやすい」、「他の人との違いがわかりやすい」などがあり、より高い目標を意識した自主的な学習が促進されたことがうかがえた。これらの実践報告は、対象年齢や学習内容の違いはあるが、効果的な看護技術修得をめざしたサポートシステムの検討に、ビデオを取り入れることの有用性を示唆していると言える。

## 2. 看護技術の練習場面における学習経験

3名の学生の看護技術の練習場面における経験内容は、学習経験としてどのような意味をもっているのか、検討する。

佐伯<sup>15)</sup>は、学習についていくつかの定義を述べているが、その中で「学習とは、『アイデンティティ形成』—自分とは何者であるかが自覚的に明確になること」と述べている。これは、いわゆる行動主義心理学の影響を強く受けていた1960年代の学習観と大きく隔たる学習者主体の学習観を表わしている。本研究でも、学習を「学習者の主体性に基づき、新たな知識や思考、行動を獲得し、学習者の内面で価値付けがなされること」と定義した。つまり、学習とは単に知識や技術、態度を獲得するだけではなく、学習対象の状況に入り込んで、自身にとってどのような意味があるのか、考え続けることである、と考える。この定義に基づけば、看護技術を学習する意味は、単なる行動体系の獲得ではなく、看護者としてのあり方の一部として看護技術が取り込まれ、自分の看護技術を作り上げる営みとなることが望まれる。本研究の対象となった練習場面での経験には、これまで見てきたように、上記で述べた学習としての意味が含まれており、軽視できない学習機会になっていると考えられる。

学生の主体的な学習が成立していると考えられる練習場面への教員の関わりは、教員個々の考えに任されていることが多いと推測される。練習時に一人ひとりの動きを見て、丁寧に指導することは、時間調整が困難な場合が多い。しかし、学生の練習場面の分析からは、教員を看護技術修得の目標として位置づけていることが明らかになり、教員の一つ一つの動きをよく見て学んでいる可能性があるため、看護者モデルを示すことが学生の求める支援である可能性がある。教員は言語を介した指導に関心を向けがちであるが、学生

は、モデルとなる教員の看護者としての自然な振る舞いや行動の中に、学生自身の行動との違いを見出し、学習している可能性があり、看護技術の修得に関わる教員は、看護者としての自身の行動に気を配ると共に、看護者モデルとしての自己研鑽を積む必要性がある。

看護技術の練習場面における学習は、これまで述べてきたように、学習の本来の意味を備えた、貴重な学習機会であると考えられる。カリキュラム変更に伴う学習時間の短縮化の中で、演習時間、実習時間は大幅に減少しており、看護技術教育の機会が減少している。看護技術の修得のためには練習時間を軽視せず、指導、支援のあり方を検討する必要がある。

本研究は、限られた時期と限られた範囲でのデータ収集による結果であり、対象の3名の学生は2学年の学生であったことから、対象や時期、場所が変われば違った結果が得られる可能性がある。

## VIII. 結論

学生は、看護技術の練習場面で練習方法を工夫しながら、友達の指摘や教員の助言を求めながら練習している。また、看護技術の練習に対して目標をもち、自分自身を変えていきたい、技術を身につけたいと思いつながりながら練習していることから、貴重な学習経験となっている。一方で、練習場面で困る、混乱する、うまくいかないという経験をしており、学習支援の必要性が示唆される。

学生は、看護技術の練習場面をビデオで見ることでより、自己を客観視して振り返ることができていたため、今後はビデオ活用を含めた学習支援の方法を検討する。

## 引用文献

- 1) 橋本直子、東原義訓：ポートフォリオ評価を取り入れた英語科における音読学習。  
<http://cert.shinshu-u.ac.jp/center/bulletin/2002/03151.pdf>
- 2) 日野原重明：医のアート、看護のアート。pp46, 中央法規（1999）
- 3) 平木民子、堀美紀子、松村千鶴、雨宮多喜子、淘江七海子：模擬患者を対象にした学生の看護技術の分析 ビデオ画像と振り返り内容の分析を通して、香川県立保健医療大学紀要, 3, 61-69（2007）
- 4) 100校プロジェクト&Eスクエアプロジェクト ビデ

- オクリップを使った体育学習（大津市立平野小学校）.  
[http://web3.cec.or.jp/jissenjirei/public/jyugyoujissen/CEC00781\\_0.html](http://web3.cec.or.jp/jissenjirei/public/jyugyoujissen/CEC00781_0.html)（1999）
- 5) 川喜多二郎：発想法. 中央公論新社（1967）
  - 6) 川島みどり：看護の時代2 看護技術の現在. pp45-65, 勁草書房（1994）
  - 7) 神原裕子：看護基礎教育における看護技術の修得過程の考察 —学生学習過程の分析から—, 第3回看護技術学会学術集会講演抄録集 73（2004）
  - 8) 厚生労働省：新たな看護のあり方に関する報告書.（2003）
  - 9) 厚生労働省：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する報告書.（2003）
  - 10) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書.（2007）
  - 11) 日下和代, 小泉仁子, 千葉由美, 二宮彩子, 清水清美, 森田久美子, 岡光基子, 矢富有見子, 乙丸晶世, 美濃由紀子, 松岡恵, 宮本真巳：臨地実習における各領域共通の看護技術チェックリスト導入の試み. 東京医科歯科大学, 看護教育47（10）, 884-891（2006）
  - 12) 南家貴美代, 森田敏子, 有松操, 木子莉瑛, 岩本テルヨ, 早野恵子, 松永保子：模擬患者を用いた看護技術教育方法の開発に関する研究 筋肉注射の看護技術試験に対する自由記載から. 日本看護学会論文集, 看護教育37, 276-278（2007）
  - 13) 盛永美保, 井下照代, 藤野みつ子, 高見知世子, 宮松直美：臨床看護技術に関する自己学習教材の開発とその評価. 滋賀医科大学看護学ジャーナル 5（1）, 93-96（2007）
  - 14) 長戸和子, 池添志乃, 大川宣容, 青本さとみ, 佐東美緒：使える看護技術の教育法 学生の看護実践力を高めるための取り組み 知識と技術の統合、実践のイメージ化を可能にするために. 看護展望 32（4）, 81-87（2007）
  - 15) 佐伯胖, 藤田英典, 佐藤学編：学びへの誘い. pp9, 東京大学出版会（1995）
  - 16) 氏家幸子：基礎看護技術第4版I, pp4 医学書院（1994）
  - 17) 吉崎静雄：デザイナーとしての教師アクターとしての教師. pp137-144, 金子書房（1997）

